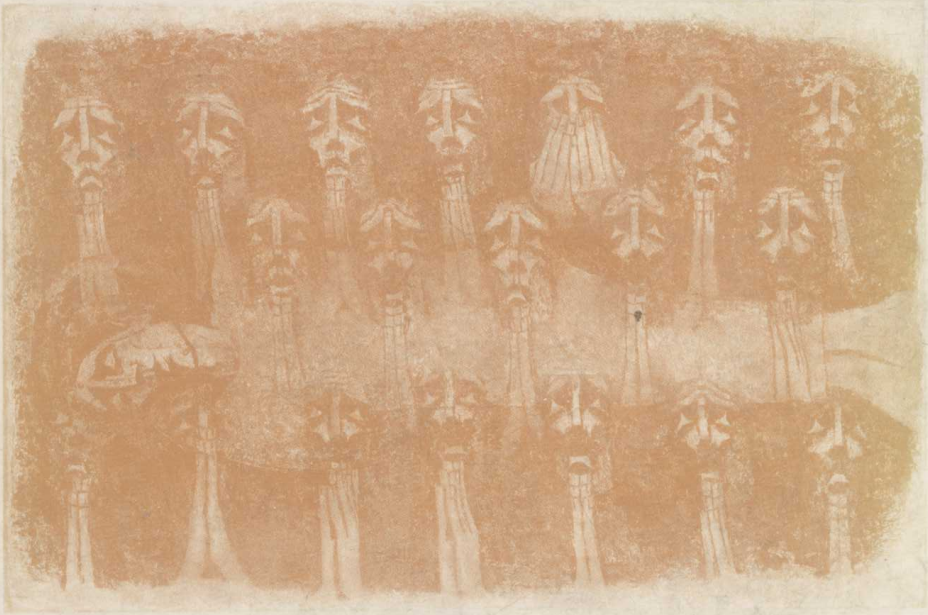
中央アジア捕虜記

死線を超えて

山崎俊一著

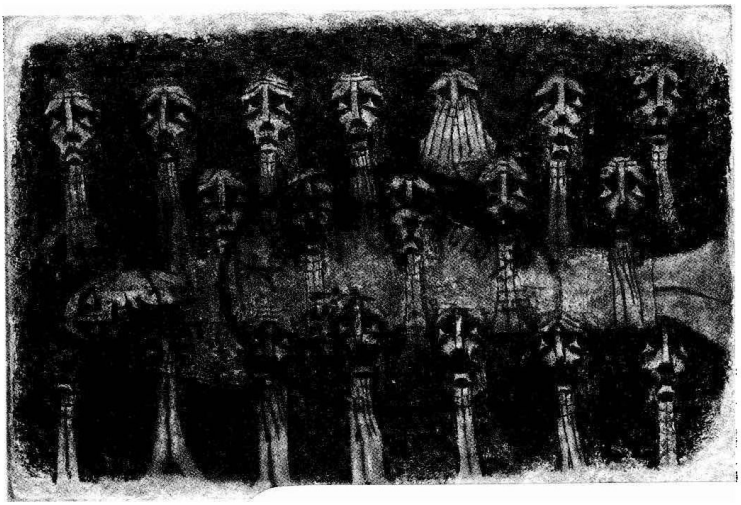


ミネルヴァ書房

中央アジア捕虜記

死線を超えて

山崎俊一著



＜著者略歴＞

山崎 俊一（やまざき・しゅんいち）

大正15年　中国東北地方（旧満州）安東省で生まれる。
昭和18年　旧制中学卒業。
昭和19年　志願で入隊。
昭和20年　ソ連参戦で幹部候補生教育解除，営口工兵隊に転属，
　　敗戦でソ連抑留（～23年，復員）。
昭和25年　法政大学中退。
　　国鉄労組高崎地方本部・書記。
昭和27年　総評本部・書記。
昭和38年　総評本部・企画部長。
昭和49年　総評本部・企画室長。
昭和51年　総評本部・常任幹事（企画局長）。
昭和55年　中央労福協・事務局長に転出，現在に至る。

中央アジア捕虜記——死線を超えて

1985年8月15日　初版第1刷発行　〈検印省略〉

定価はカバーに
表示しています

著　者　山崎俊一
発行者　杉田信夫
印刷者　江戸夘一郎

発行所　株式会社　ミネルヴァ書房

607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話（075）581－5191（代表）
振替口座・京都2－8076

© 山崎俊一，1985

共同印刷工業・酒本製本

ISBN 4-623-01623-4
Printed in Japan

中央アジア捕虜記——死線を超えて　目次

敗戦下の南満州……1
未曽有の混乱下錦県へ　1
錦県飛行場に集結　3
武装解除の日……6
国策の悲惨な犠牲者　6
武装解除の日　9
アムール河の悲劇……12
満州よさらば　12
死のアムール氷上渡河　15
地の果てへの旅……18
絶望という名の列車　18
地の果てに浮かぶ捕虜収容所　23
第三収容所……25
ラーゲルの全容　25
共同青空便所　28
地獄の人間模様……33
純朴な現地人たち　33
食い物こそがすべて　36

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いよいよ作業開始……39
馬並みの品定め 39
突貫小隊もほぞを噛む 41
要領のいい日本人……47
「数字」に弱いロシア将校 47
トンボーチカの攻防 48
明日なき流転の旅路……53
珍妙な捕虜スタイル 53
ノルマ制度の矛盾 56
ノルマ制度の明暗……59
何が幸いするかわからない 59
「太陽の女神」 62
エリートへの階段……65
美人に弱い日本隊 65
所長の娘が自殺 68
最悪の自然環境……71
これが人間の住むところか 71
「チンピラ」になりたい 74

食糧事情やや好転……77
無茶食いの珍事 77
配給パンの増量 79
〝女護ケ島〟の収容所……82
理容技術者募集 82
最高の果報者 84
収容所に革命の嵐……88
悲惨な下級兵士たち 88
昂揚する民主化運動 90
日本とドイツの捕虜気質……96
暗くなった収容所 96
ドイツ人の気魄 100
地底でバンザイ……104
臭気満々 104
くさい「お大尽」 107
男女平等と性の解放……109
完全な男女平等 109
あけすけな性論議 112

転落のエリート……115
法律なんて電柱みたいなもの 115
女房はこわい 117
演芸会のはじまり……122
司会者から演芸活動に 122
とうとう漫才にまで 124
演芸中隊の発足……129
漫才でスターの座に 129
順風満帆の演芸中隊 133
猫捕獲犬作戦……136
楽劇団生みの苦労 136
作戦の大誤算 138
順調な演芸活動に暗雲……142
女形の悲哀 142
対抗音楽祭で優勝 144
一陣の砂嵐……148
検閲制の強化 148
赤鬼も親バカ 151

葉書のもたらす悲喜劇……155
ロシアからの葉書 155
罪作りな便り 157
第三ラーゲルとの別れ……162
突然の転出命令 162
タシケントに向かって 165
砂漠の長い一日……169
休日の楽しみ 169
蠟チン、危機一髪 172
鉄条網なき収容所……177
教育ラーゲル 177
調子に乗りすぎ破滅 181
統制経済の網の目……185
恵まれた作業環境 185
大尉のゴリ押し 189
コルホーズの異様な雰囲気……193
食欲が満たされると 193
日本人への変な幻想 196

墓場への準備完了……201
ついに病魔に冒される 201
命の恩人マルーシャ 204
ある民主化リーダーの末路……209
孤独と憎しみ 209
病院は人生の終点 213
こんな幽鬼に誰がした……218
厭な死体処理作業 218
伯父夫婦の歓待 221
待ちに待った帰国列車……226
マルーシャよ、しあわせに 226
ダモイのうわさ 229
天国と地獄の岐路……235
中央アジアよさらば 235
恐怖のドンデン返し 239
ふるさとへの道……245
幸福の〝ストレート乗船〟 245
船上での惨劇 249
あとがき 255

敗戦下の南満州

未曾有の混乱下錦県へ

一九四五年（昭和二十年）の夏――

われわれ営口第四七四部隊が満州西南部の要衝、錦県にたどり着いたのは、その年の八月二十日であった。

それまで、満州西北部熱河省の内蒙古あたりを転戦し、なぜか後方部隊に連絡しても何の連絡も取れない状況の中で、連日連夜の強行軍に疲れ果て、ほうほうの態で後退に後退を重ねていた。

錦県の市街は、あちこちから猛煙が吹きあがり、大混乱に陥っていた。その中で市民は荷物を持って、思い思いの方向に動きまわっていた。そんな状態を見て、われわれはてっきり空襲でも受けたのかと思い、とりあえず部隊長の判断で移動しやすい駅のほうに向かった。

いくら戦いに疲れたといっても、日本軍のみじめな姿を市民に見られたくなかったので、われ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

われはカラ元気を出して胸を張り、しっかり隊伍を組んで歩いたが、変なことに気がついた。
わずか数日前と比べて、中国人（支那人と呼んでいた）のわれわれを見る眼がまったく違っていた。いままでわれわれが市内に入るときは、ニコヤカな顔で歓迎の姿勢を見せていたのだが、そんな素振りを見せるどころか冷ややかな、むしろ軽蔑と嘲笑のまなざしで眺めていた。
駅に着くといっそうゴッタ返していた。それどころか群衆が何かを叫びながら、貨車の中や野積みになっている米や雑穀を手あたり次第に掠奪していた。
こんな状態をなぜ放置しているのかといぶかしんでいると「おい！」と肩を叩く者がいた。懐かしや同級生のKであった。彼は衛生兵の伍長で傷病兵の護送隊を指揮していたが、彼自身も頭に包帯を巻き、その包帯に血がドス黒くにじみ出ていた。
「だいぶ、ひどくやられたな。よく生きのびてこられたじゃないか」
「お前だって、ずいぶんひどい格好じゃないか」
久し振りに笑いあった。
「ところで、あの騒ぎは何だ。なぜ警察や守備隊は制止しようとしないんだ」
「なんだ、お前知らなかったのか。戦争は終わり、日本は敗けたんだぞ。あの連中が何をしようとわれわれは手出しできないんだ。それよりわれわれが北支から来る途中、日本人がかなり掠奪や暴行を受けているという話を聞いたぞ」

途端に眼の前が真暗になった。とっさに頭に浮かんだのは満州の南端、安東市にいる家族のことであった。K君も同市出身だったので同じであろう。

「安東もこんな状態になっているのかな」

「おそらくそうだろう。大変なことになったものだ」

全身から力が抜けてゆくようで、しばらくは何も言う気になれなかった。

「××部隊集合！」

ハッとわれに返った。

「ただいまより、前方の倉庫一帯で野営する。直ちに設営にかかれ！」

気を取り直し、あわただしく野営の準備をしていると、三騎の馬に乗った将校が駆けてきた。そして、馬上の少佐が怒鳴った。

「貴様たちはどこの部隊か、こんなところに野営してはいかん。いいか、全員錦県飛行場に集結せよ。これは関東軍命令だ！」

錦県飛行場に集結

錦県飛行場は騒然たる空気に包まれていた。

われわれのように興安嶺方面から撤退してきた部隊、北支方面から山海関を経て北上してきた

部隊、ソ連軍の北方からの侵入によって新京（長春）、奉天（瀋陽）方面から南下してきた部隊など、およそ十万に近い軍隊がここに集結していた。

さしもに広い飛行場も幕舎の波で埋まり、各部隊が早い者勝ちとばかりに、てんでバラバラに糧秣や被服などを運び込んでいた。

幸いなことに、この飛行場の被服庫や糧秣庫には厖大な食糧や被服が備蓄されてあって、食うものも食わず後退してきたわれわれは、久し振りで白い米にありつけた。味噌も醤油もキャラメルも水飴もあった。酒は樽で山積みしてあった。ただ、水不足は深刻であった。ここではじめて水に酒をまぜた「酒風呂」に入ったが、これにはかなり酔っぱらった。

しかし、これほどの部隊が集結しながらまったく統制は取れてなかった。

それは第一に、不滅の「神国日本」として、神がかりの戦争に敗けたため、もう頼るべきものも失ったという感じで、敗戦という現実をどう受けとめ、今後どう対処してゆくのかという理解がバラバラだったこと、第二に、指揮系統のまったく違う部隊が何の連携もないままに勝手に集まってきたこと、第三に、これほどの大軍が集結しながら、交戦部隊を放置して、最高指揮官から真先に撤退してしまって将官が一人もおらず、終戦直前に予備役から編入されたばかりの、かなり老年の中佐が最高指揮者として指揮にあたっていたこと、などのためである。

したがって、間もなく開かれた指揮官会議でも、体制を建て直して一戦交えるのか、それとも

このまま武装解除を待つのか、決定もなされず、上級司令部に対する激しい不満ばかりが出て、まとまらない日が続いた。

おそらく特攻の生き残りと思われる、若いパイロットがまだ残っていた九七式の戦闘機に乗って、狂ったように連日、空を飛びまわったり、自暴自棄になって拳銃や軍刀などで自殺をはかる将校、酒を飲んで暴れまわる下士官、兵器を持って街に暴れに行く兵隊、満州にいる家族の身を案じて私服に着替えて逃亡する者などが続出したが、それらを規制する統制力もなく、まさに百鬼夜行の状態にあった。

こうしたあいだにも「武装解除」の日が、日一日と迫っていた。

武装解除の日

国策の悲惨な犠牲者

当時、錦県市街では終日不気味な銃砲声が響きわたり、その中を毎日、在留邦人をはじめ、統制機能を失った日本軍が、悄然と移動したり、集結したりしていた。

錦県の街ばかりではなく南満州一帯には、まだ国民党軍や地方の豪族が随所に拠点を構えて、このときとばかりに暴れまくっていた。そして、九月に入ると統制の取れた中共軍が大挙進出してきて、ソ連軍と連携して作戦行動に入る一方、日本軍のつくった傀儡満州国軍が敗戦の事実を知って叛乱を起こした。

まさに乱世の様相を呈していた。

一般市民も邦人も、誰を頼りに生きていっていいのかわからなかった。誰と誰がどこと戦っているのかもわからないため、老人、子供、女たちは外出もせず、じっと息をひそめて暮らしてい

た。

特に悲惨だったのは、国の政策に従って日本からはるばる満州の北辺に入植してきた「満蒙開拓義勇団」の人たちであった。その数は総数二十七万ともいわれていた。

「バラ色の桃源境」とか「王道楽土」というカネや太鼓の触れ込みで入植してきたこれらの人たちは、荒野を開拓し、孜々営々として築き上げてきた全財産を、敗戦と同時に一挙に失ってしまった。

われわれは三八式歩兵銃と軽機関銃というお粗末な装備ではあったが、「邦人保護」という名目をつけて、時折、市街に出動していた。家の戸はすべて閉ざされ、あちこちに負傷者がうめき、死体がころがっていた。

ある日、われわれがトラックで巡回していると二人の女性がヨロヨロと歩いていた。ひと目で開拓団から逃げてきた日本人とわかった。

彼女らは頭を坊主刈りにし、ボロボロのモンペ姿もあちこち破れ、その中から白い太股がのぞいていた。手には空きカンと汚れた袋をブラ下げ、お互いに支えあうように歩いていたが、もう精も根も尽き果てたかのようだった。

二人をトラックに収容し、食べ物をやると、やや元気を取りもどし、二十八歳という若いほうの女性が涙ながらに語ってくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com